

令和5年度入学者選抜学力検査問題【国語（本試験）】について

著作権の都合上、Web掲載の際に下記のとおり出典表記を修正しております。予めご了承ください。

記

該当箇所：15 ページ 14 行目下段

修正箇所（下線部が付記部分）：（瀧羽^{たきわ}麻子^{あさこ}『博士の長靴』（ポプラ社）による）

令和五年度入学者選抜学力検査本試験問題

国語

(配点)

1	30点
2	40点
3	30点

(注意事項)

- 1 問題冊子は指示があるまで開かないこと。
- 2 問題冊子は一ページから十八ページまでである。検査開始の合図のあとで確かめること。
- 3 検査中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、静かに手を高く挙げて監督者に知らせること。
- 4 解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号と一致したマーク部分を塗りつぶすこと。
- 5 解答には、必ず**H Bの黒鉛筆**を使用すること。なお、解答用紙に必要事項が正しく記入されていない場合、または解答用紙に記載してある「マーク部分塗りつぶしの見本」のとおりマーク部分が塗りつぶされていない場合は、解答が無効になることがある。
- 6 一つの解答欄に対して複数のマーク部分を塗りつぶしている場合、または指定された解答欄以外のマーク部分を塗りつぶしている場合は、有効な解答にはならない。
- 7 解答を訂正するときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ふつうは見逃されてしまうようなことでも、そこにある良さも悪さも見抜いてしまうのが道の人である。兼好が興味を持っていたもののひとつが馬乗りである。『徒然草』第一八五段には「城陸奥守泰盛は、双なき馬乗りなりけり。馬を引き出させけるに、足を揃へて、鬩をゆらりと越ゆるを見ては『これは勇める馬なり。』とて、鞍を置き換へさせけり。」という。執権北条貞時の外祖父（母方の祖父）であった安達泰盛は、並ぶ者のない馬乗りといわれ、馬が敷居をまたぐのを見るだけで「これは気の立っている馬だ。」と他の馬に替えさせた。逆に、足を伸ばしたまま敷居にぶつけるような馬は鈍い馬だとして乗らなかつたという。「道を知らざらん人、かばかり恐れなんや（道を知らないような人は、これほど用心するだろうか）。」とあり、道について深く知っているからこそ、これほどまでに用心するのだということである。第一八六段には「吉田と申す馬乗り」がその道の秘訣を述べる。

吉田と申す馬乗りの申し侍りしは「馬毎にこはきものなり。人の力、争ふべからずと知るべし。乗るべき馬をば、先づよく見て、強き所弱き所を知るべし。次に、轡・鞍の具に、危ふき事やあると見て、心にかかる事あらば、その馬を馳すべからず。この用意を忘れざるを馬乗りとは申すなり。これ秘蔵の事なり。」と申しき。

馬は①でもゴウ情なものであり、人の力はこれと争うことができないと知らねばならない。乗ることになっている馬を、何よりもよく観察して強いと弱いところを知るのがよい。次に、轡・鞍など道具に危ない所はないか点検し、気になるところがあればその馬を走らせてはならないという。②けつして難しいことをいつているのではなく、ごく当たり前のこと、誰にでもできることを弁え、自然に行動に移せるかどうかというのが、「馬乗り」の馬乗りたることであり、それがほんとうの道を知ることなのである。

このようにして馬をよく見、その特徴をとらえるということができないで、不用意に馬に乗る者は落馬する。本人はわかっていなくとも、その道に心得のある人は予めその不運を見抜いてしまう。第一四五段では、

御隨身秦重躬、北面の下野入道信願を、「落馬の相ある人なり。よくよく慎み給へ。」といひけるを、いと真しからず思ひけるに、信願馬より落ちて死ににけり。道に長じぬる一言、神の如しと人思へり。さて、「いかなる相ぞ。」と人の問ひければ、「極めて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、此相を負ほせ侍りき。いつかは申し誤りたる。」とぞ言ひける。

道に長じた者の的確な見極めを人々は不思議だ「神の如し」だと思ったが、「落馬の相」を読み取ったのは単なる見込みでもなければ当て推量でもない。③きわめて合理的な判断に基づいている。それは、「桃尻」、馬の鞍に尻の据わりの悪い人と、「沛艾の馬」、気の荒い馬という両者のもとの不適合が、落馬という当然の成り行きになることを体験的に知っていたからである。どういうときに人間は過ちを犯すかということ、道の名人といわれる人は見抜く目をもっている。

第一〇九段では「高名の木のぼり」と世間でいわれていた男が、人に指図して高い木にのぼらせて木の枝を切らせたときに、非常に危なそうに見える間は何もいわないで、家の軒先の高さまで降りてきたときになってやっと、「過ちすな。心して降りよ。」とことばをかけた。そういわれた人が「かばかりになりては、飛び降るとも降りなん。如何にかく言ふぞ。」、これくらいになったからには、飛び降りても降りられるだろう、どうしてそんなことをいうのか、と尋ねると、「その事に候ふ。目くるめき、枝危ふきほどは、己れが恐れ侍れば、申さず。過ちは、安き所になりて、必ず仕る事に候ふ。」と答えた。眼が回るような高い所、枝が今にも折れそうな所は本人が自ずと恐れ注意を払っているからいう必要がない。しかし過ちは安全と思われるところになって必ずしでかしてしまうものであるという。兼好は、こういう名人、達人とされる人のことばは、その身分は低くとも聖人の戒めに適っていると共感している。道の名人は何を見ているのか、そこに見える真実とは、失敗は油断から生まれるという当たり前のことを、まさに当たり前のこととして受けとめ、自然とそれが行動となってあらわれる、無理のないあり方であるともいえる。

いずれにせよ、道の真実を知っているがゆえに敬われる人たちのことばは、計り知れぬ深さがその背後には感じられる。専門家は、その道の本質をつかんでいるが故に、かえってダイナミックなものの方ができる。そこに合理性もあり、力動性もある。それはどの道においてもいえる。第一〇段では、双六の上手といわれる人に、その方法を聞いたところ、その答えは、「勝たんと打つべからず。負けじと打つべきなり。いづれの手か疾く負けぬべきと案じて、その手を使はずして、一目なりとも、おそく負けべき手につくべし。」勝とうと思つて打つてはいけない。負けまいと思つて打つのがよい。どの手がきつと早く負けるだろうかと考えて、その手を使わないで、たとい一目でも遅く負けると推測される手に従うべきだという。勝とう勝とうと気持ち前へ出るときすでに欲に捕らわれている。負けまいと思えるのは余裕があるからである。むしろ、勝ち負けに強くだわるために自らを失うということがない冷静さを身につけよといっているように思われる。このように慎重にことを運ぶことは、生き方としては消極的に見えるかもしれない。しかし、ここで兼好が考えようとしているのは、このあえてしないことの中に積極性があるということである。

無為とは何もしないということではない。仮に何もしないようなかたちを取ることも、必ずそこに積極性が生まれている。道の人はそのことを知っている。天地自然のはたらきにカンを入れずびったり即して生きることが、世ゾク世界に「無用」であり続けることが、同時にそのはたらきのきまり、すじみちに通曉することに通じる。第二二六段では、

博打の負け極まりて、残りなく打ち入れんとせんにあひては、打つべからず。立ち返り、続けて勝つべき時の至れるとしるべし。その時を知るを、よき博打といふなり。

ということばを挙げています。博打打ちもまた道を知れる者であつて、多年の経験から運命の定めるところを知っている。無為のところ引き絞られた力は必ず攻セイへと転ずる時を待っている。そのことがわかるかどうかは、外形に捕らわれないで本質を見抜く目を持っているかどうかで決まる。そ

れに気づくためには、謙虚さがなければならぬ。

その「一道に携はる人」の心得を説いたのが第一六七段である。

我が智を取り出でて、人に争ふは、角ある物の角を傾け、牙あるものの牙をかみ出だす類なり。人としては善に誇らず、物と争はざるを徳とす。他にまさることのあるは大いなる失なり。

という。自分の智慧を持ち出して自分がすぐれていることを自慢する気持ちで争うのはよくない。家柄の高さにせよ才芸の優秀さにせよ、自分が勝っていると思つて相手を見下すその内心のありようが、すでに「とが」つまり欠点となっている。

をこにも見え、人にもいひ消たれ、禍を招くは、ただこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、みづから明らかにその非を知る故に、志常に満たずして、終に物に誇る事なし。

本人がどんなにすぐれていると思つても他人から見ると馬鹿らしく見え、わざわざを招くのはまさにこの慢心であるという。道の人はそれを知つており、けつして自分が完全であるなどとは思わない。むしろ、自らを持たざる者として位置づけ、その人なりのあえて何もしない「無為」を貫くのである。それは意識してできることではなく、道の追究において身につくものであり、それは、現世にいながら現世を超える自在さとなるだろう。兼好はそこに人間観としての無為の積極性を見いだしているように思われる。(藤本成男『徒然草のつれづれと無為』による)

(注1) 兼好||鎌倉末期の歌人、随筆家で『徒然草』の著者。(注2) 関||門の内外を区切る境の木。敷居。

(注3) 鞍||人が乗りやすいように馬などの背につける道具。(注4) 轡||手綱をつけるために、馬の口にかませる金具。

(注5) 双六||盤と二個のサイコロ、黒白の駒を使って二人で行う遊戯。賭け事にも用いた。

(注6) 通曉する||あることについて詳しく知っている。(注7) 博打(を打つ)||賭け事(をする)。「博打打ち」は博打で生計を立てる人。

問1 本文中の、ゴウ情、カン髪を入れず、世ゾク、攻セイ のカタカナ部分の漢字表記として適当なものを、それぞれアからエまでの中から一つ選べ。

- | | | | | | | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|----------|-----|-----|-----|-----|
| ①ゴウ情 | ア 業 | イ 豪 | ウ 合 | エ 強 | ②カン髪を入れず | ア 卷 | イ 感 | ウ 間 | エ 完 |
| ③世ゾク | ア 族 | イ 俗 | ウ 続 | エ 属 | ④攻セイ | ア 制 | イ 成 | ウ 正 | エ 勢 |

問2 本文中の、並ぶ者のない と同じ意味用法の「の」を、本文中のaからdまでの中から一つ選べ。

- | | | | |
|-----------|-----------|--------|----------|
| a またぐのを見る | b 気の立っている | c 他の馬に | d 用心するのだ |
|-----------|-----------|--------|----------|

問3 本文中に、「馬乗り」の馬乗りたるどころ とあるが、「吉田と申す馬乗り」が述べている馬乗りの心得の説明として最も適当なものを、次の

アからエまでの中から一つ選べ。

ア 自分が乗ろうとしている馬をよく見てその気性を把握したり、馬具などで気にかかる点があれば馬を走らせないようにしたりするなど、当然のことをよく理解し自然に行動できる。

イ 人の力は馬の力には到底及ばないと知ったうえで、自分が乗ることになっている馬を観察しながらよい部分を見極め、その馬の能力のすべてを引き出せるよう自然に行動できる。

ウ 轡や鞍などを装着したときの反応によってそれぞれの馬の気性を知ることができるので、馬具の状態をよく確認することを通じて、馬のよしあしを自然に見抜けるようになる。

エ 人は馬の真の力に勝つことができないうことをよく知り、自分が乗る馬の強いところ弱いところの両面を十分見極めることによって、馬のよしのよしあしを自然に見抜けるようになる。

問4 本文中に、きわめて合理的な判断 とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 馬の体格に自分の性格を合わせられない人は落馬するということを、体験的に知ったうえで下す判断。

イ 人の体つきと馬の気性の組み合わせが悪いと落馬するということを、体験的に知ったうえで下す判断。

ウ その日の馬の状態を正確に把握できない人は落馬するということを、体験的に知ったうえで下す判断。

エ どんなに有能な人でも気性が荒い馬に乗ると落馬するということを、体験的に知ったうえで下す判断。

問5 本文中に、聖人の戒めに適っている とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 低いところまで降りてきた弟子に声をかけた「高名の木のぼり」の言動は、屋外では予想外の出来事が起きるといふ当たり前のことを当たり前のこととして受けとめ、それが自然に行動に移されたもので、聖人の教えをよく理解したものである。

イ 油断しそうな弟子の性格を見抜き適切に声をかけた「高名の木のぼり」の言動は、才能のないものは失敗するといふ当たり前のことを当たり前のこととして受けとめ、それが自然に行動に移されたもので、聖人の教えと異なるものである。

ウ 安全な高さまで弟子が降りてきたところで声をかけた「高名の木のぼり」の言動は、失敗は油断から生まれるといふ当たり前のことを当たり前のこととして受けとめ、それが自然に行動に移されたもので、聖人の教えに通じるものである。

エ 弟子が安全な高さまで降りたときに声をかけた「高名の木のぼり」の言動は、常に細心の注意を払って行動するといふ当たり前のことを当たり前のこととして受けとめ、それが自然に行動に移されたもので、聖人の教えを踏まえたものである。

問6 本文中に、あえてしないということのうちに積極性がある。とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア あえて慎重に振る舞い、一見行動していないように見えても、実際は適切な折をとらえてうまくことを運べる機会が来るのを待っている。
- イ あえて勝ち負けを無視し、一見勝敗を気にしないように見えても、実際は自然の法則を分析しつつ勝負に出る機会が来るのを待っている。
- ウ あえて大胆な行動を控え、一見我慢しているように見えても、実際は成功に強くこだわり競争相手に打ち勝つ機会が来るのを待っている。
- エ あえて合理的に考え、一見冷徹に計算しているように見えても、実際は心の余裕を保つことで最後に成功する機会が来るのを待っている。

問7 本文中に、「一道に携はる人」の心得。とあるが、どのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 自分が他人より優れていると思うことがかえって自分の弱点を見抜かれたり他人に陥れられたりする要因になることを重く受けとめ、どんなときも自分が冷静でいられる道を追究すること。
- イ 自分が他人より優れていると思うことが他人から攻撃されたり嫉妬されたりする原因になることをよく知っていて、他人の言動をよく見極め、他人と争うことを避けつつ道を追究すること。
- ウ 自分が他人より優れていると思うことがわざわいを招くもとなることをよく知っていて、どのようなときも慎み深く振る舞うとともに、今の自分に満足することなく道を追究すること。
- エ 自分が他人より優れていると思うことがわざわいを招くもとなることを経験的に理解しており、どのようなときも他人を尊重するよう心がけて、すべての人と調和する道を追究すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

数十年周期での大きな気候変動が起きたときに、しばしば大きな飢饉や社会の騒乱が起きるが、その背景にはどのようなメカニズムがあるのであるか。ここでは簡単な概念図を示して一つの思考実験を試みたい。

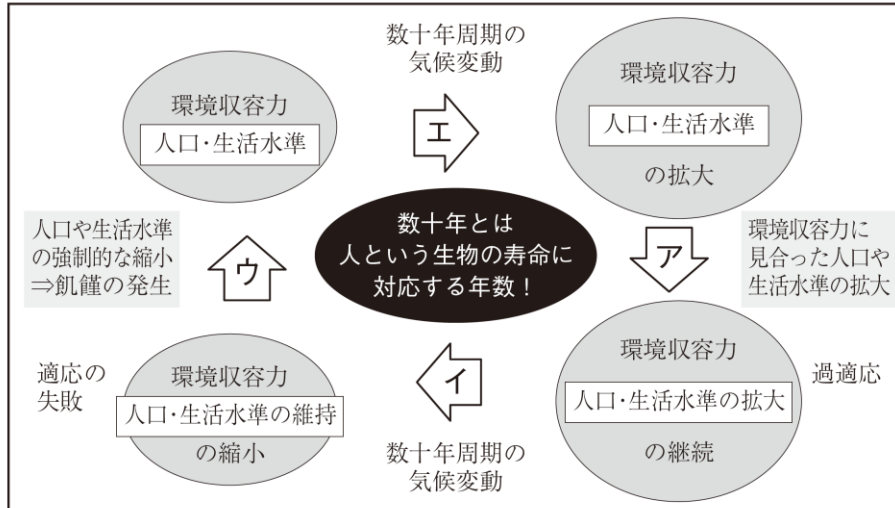


図1

図1は、^(注1)前近代の農業社会を念頭に置いて、農業生産に影響を与えるような数十年周期の大きな気候変動が起きたときに社会に何が起こるかを想像したものである。どのような社会もそうであるが、その社会を構成する人々の人口や平均的な生活水準は、その社会を取り巻く環境の収容力、具体的にはその地域の農業生産量などが許容する範囲内に収まっている必要がある。現在の地球環境問題では、地球の人々の総人口や平均的な生活水準が地球の環境収容力の限界を超えていること、^①このままの生活を続けていたら持続可能性がないことが問題なのだ、過去の世界であれば、その空間スケールは人間の行動や流通の範囲を反映してもっと狭く、弥生時代であれば一つのムラ、江戸時代であれば一つの藩といったスケールで起きている現象をこの図は想定している。

^Aあるとき数十年周期の気候変動が起きて農業生産力が増大したとする。この豊作が一年か二年で直ぐに元に戻るのであれば、人々は束の間の豊作を神様に感謝して穀物の備蓄に励むだけだろうが、数十年周期の変動の場合は豊作の期間は一〇年や二〇年も続くので、その間に人々は豊作に慣れて、人口を増やしたり(出生率をあげたり)、生活水準を向上させたりした物と思われる。しかし、これは数十年周期の変動なので、やがて農業生産力は元に戻ってしまう。そのときには、豊作期の豊かな時代に育った若者をはじめとして、人々には自主的に生活水準を下げたり人口を減らしたりすることは難しく、結果的に飢饉の発生や難民の流出によって半強制的に人口が減らざるを得なかった、と考えられる。

数年周期の変動であれば、凶作年にはあらかじめ備蓄しておいた穀物で食いつなげるし、何より豊作の年に人口が急が増えたりはしない。逆に数百年周期の変動であれば徐々に生産力が変化するので、人々には対応の時間的余裕があり、農業技術を革新したり農地面積を拡大したりすることもできただろうし、生産力の上昇期には出生率の増大、低下期には出生率の減少を通じて、大きな痛みを伴うことなく、ゆっくりと気候変動に適応できた可能性もある。

②、数十年周期の変動の場合は、短期間での

技術や農地の変革は難しく、穀物備蓄もすぐに底を尽き、出生率の調整では時間的に間に合わず、多くの人々が飢饉に直面したことが想像できる。つまり数十年周期の変動は、予測も対応も難しい時間スケールなのである。出生率を介した人口調整との関係でいえば、数十年とはちようど人間の寿命に相当する時間スケールであり、それゆえにこそ効果的な対応ができなかったことが予想できる。

このような話を歴史研究者の皆さんを相手にしていると、「数十年周期の変動が重要なのは何となくわかったけど、具体的に何に着目したらよいかからない。」という感想を頂くことが多い。それは、気候・環境変動や自然災害に対する社会の復元力（レジリエンス）を研究しておられる方々から特に多く聞かれる。そういう方々の多くは、気候災害などが起きた「後」の社会の対応に注目しておられる場合が多い。もちろん、災害復興過程の研究では、災害後の社会の状況を観察することは不可欠だが、実際には、「気候がよい時代や災害がない時代に、いかにその状態に過適応してしまっていたか」が重要である。過適応がなければ、つまり人口や生活水準を野放図に拡大しなければ、次に起きる気候の悪化や災害に対処できた可能性がある。

③ 人々は「気候変動や自然災害に適応するため」だけに生きている訳ではないので、農業生産力の高い時代には、それを最大限生かした生業や政策を展開することが、中世であれば他国との闘いに、近世であれば市場での競争に打ち勝っていくために、必要不可欠なことだったと思われる。しかし生産力の拡大期の論理に適応し過ぎれば、生産力が縮小に転じた時期にブレーキが利かなくなる。切り替えがうまくまい為政者がいれば、両時期に的確に対応できる可能性もあるが、通常はその両者に適応できる人間は少ないし、もとより為政者だけがそのことを理解していても社会の構成員の多くが理解していなければ、対応が難しいことは同じであろう。歴史上の気候変動と人間社会の関係の背後には、そのような構図があるものと思われる。

つまり気候のよい時期・豊作の時期における社会のあり方や人々の考えを知ることが、気候適応史研究の一つの焦点になるべきである、と私は考えている。このことは、気候変動だけでなく、地震・津波・火山噴火などの地殻災害、あるいは新型コロナウイルスをはじめとする感染症の蔓延、さらに経済循環などの人間社会に内在する変動にまで、あらゆることにも当てはまるものと思われる。昨今の例でいえば、感染症のパンデミックがなかった時代にパンデミックが起きたときのことを何も想定せず、保健所の機能を単に合理化縮小してしまつたこと、津波が来ない時期が何十年も続くうちに沿岸域の危険な場所に住居を広げてしまったことなどなど、あらゆることが図1の構図に当てはまる。すべて、気候・環境が悪化して災害が起きてからではなく、その前の平時における環境悪化・災害発生への備え・適応力が問われているのである。そのことを、まさに研究の対象にしなければならない。考えてみればあたり前のことが、歴史の研究はもとより、日常生活一般、さらにいえば国会の審議のなかでも、必ずしも意識されていないことが問題であるといえよう。

(注1) 前近代Ⅱ明治維新より前の、科学や技術の進歩による資本主義経済がまだ発達していない時代。

(注2) 環境収容力Ⅱある環境下において、持続的に維持できる生物の最大個体数、または生物群集の大きさ。

(注3) 野放図Ⅱ際限がないこと。しまりがいいこと。

(注4) 生業Ⅱ生活していくための仕事。

(注5) 中世Ⅱ鎌倉時代および室町時代。

(注6) 近世Ⅱ安土桃山時代および江戸時代。

(注7) 為政者Ⅱ政治を行う者。

(注8) 蔓延Ⅱはびこりひろがること。

問1 空欄①、②、③に入る語として適当なものを、それぞれ次のアからエまでのの中から選べ。ただし、同じ記号は二回使わない。

ア もちろん イ つまり ウ しかし エ やがて

問2 本文中の、^(a)束の間の、^(b)介したの意味として適当なものを、それぞれ次のアからエまでのの中から選べ。

(a) ア 継続的な イ 少しの間の ウ 定期的な エ 久しぶりの

(b) ア 重視した イ 付け加えた ウ 兼ね備えた エ 仲立ちとした

問3 本文中に、⁽¹⁾その地域の農業生産量などが許容する範囲とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア その地域で生産される農作物の総量などが、その地域の人口や生活水準をどの程度満たせるかという範囲。

イ その地域の人々が、農作物などを最大限生産し続ける状態をどれくらいの期間継続できるかという範囲。

ウ その地域で生産される農作物の量などが、その地域の人口や生活水準を持続的に維持できる範囲。

エ その地域の人々が、自然環境に悪影響を与えずに農作物などを持続的に生産できる農地面積の範囲。

問4 本文の破線部A・B・Cの内容に対応する矢印を、それぞれ図1のAからEまでのの中から選べ。ただし、同じ記号は二回使わない。

A あるとき数十年周期の気候変動が起きて農業生産力が増大した

B 数十年周期の変動の場合は豊作の期間は一〇年や二〇年も続くので、その間に人々は豊作に慣れて、人口を増やしたり(出生率をあげたり)、生活水準を向上させたりした

C 飢饉の発生や難民の流出によって半強制的に人口が減らざるを得なかった

問5 本文中に、数十年周期の変動は、予測も対応も難しい時間スケールなのである。とあるが、なぜか。「対応が難しい」理由の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 住民の人口が増加を始めたときには、既に気候変動で生産力が減少しているが、その時点から計画的に農業の技術革新を進めて生産力を高めようとしても、計画の実現には人間の寿命と同じ数十年単位の時間が必要となり、対応が間に合わないから。

イ 生産力の減少期には、それまでに増大した全人口が生産可能なだけの食糧を確保できなくなるが、生まれる子供の数をその時点で減らし始めたとしても、人口が十分減るまでには人間の寿命と同じ数十年の時間がかかり、対応が間に合わないから。

ウ 住民の人口が増加を始めると人々の生活水準も上がっていくが、その時点で住民は既にぜいたくに慣れてしまつてより多くの食糧を求めるようになり、その人々の寿命である数十年の間は同じ状況が続いてしまい、結果的に対応が間に合わないから。

エ 生産力の減少期を迎えたときには、気候は再び増産可能な方向で安定し始めているが、その時点で既に人間の寿命である数十年単位の人口減少が続いているため、農産物の増産を可能にするだけの労働力を確保できなくなり、対応が間に合わないから。

問6 本文中に、その状態に過適応してしまつていたとあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 災害がなく気候もよい状態を当然のように受け入れて、人口を増やしますます豊かな生活をおくる一方で、生産力が減少するかもしれない事態への備えを怠っていた。

イ 災害がなく気候もよい状態を普通だと考えて、従来通りの方法だけで農業生産力を維持できると思い込み、豊作を継続させるための技術革新や農地拡大を怠っていた。

ウ 災害がなく気候もよい状態が続くことを当然であると信じて、農業技術の革新により、市場での競争に打ち勝つていく一方で、穀物を備蓄する量も増やし続けていた。

エ 災害がなく気候もよい状態が生存には最適だと判断して、生産力の拡大を続ける一方で、他国との闘いを繰り返し、より温暖で災害の少ない地域に進出し続けていた。

問7 本文中に、そのこととあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 農業生産力が高い時期と、縮小に転じた時期とでは必要な対処が異なるため、それぞれの時期に応じた適切な対応が必要だということ。

イ 他国と闘う中世と、市場での競争が求められる近世とでは必要な対策が異なるため、それぞれの時期に応じた政策が必要だということ。

ウ 気候変動と人間社会との間には、長年続いた複雑な関係があるため、気候変動への適切な対応には歴史的知識が必要であるということ。

エ 社会の為政者と構成員とでは、状況に応じて取るべき対処がそれぞれ異なるため、日頃から両者の密接な連携が必要であるということ。

問8 本文中に、平時における環境悪化・災害発生への備え・適応力が問われているとあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 日常生活の中で人々がどんな心理に陥りやすいか想定しておくことで、緊急時に取るべき対策を決める手がかりを得ることができ、社会の復元力を高めることができるから。

イ 災害が起きた後に社会はどう対応したかではなく、災害が起きる前に社会は災害にどう備えていたかを問題点とすることが、気候適応史研究を特徴づけている視点であるから。

ウ 日頃から自然災害や気候の変動を正確に観測し、大規模な被害につながるすべての可能性を想定しておくことで、被害が起きた後早急に復興をはかることが可能となるから。

エ 気候の悪化や自然災害に伴って起きる大規模な社会の混乱を防ぐには、自然災害や環境変動が起きた後の対策だけでは十分でないことが、これまで歴史で明らかであるから。

3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

母子家庭に育った大学生の「僕」は、気象学が専門の藤巻先生の研究室に入った。先生の依頼で先生の息子^{かずや}和也の家庭教師になったが、和也は研究熱心な父には似ず、勉強が嫌いで集中できない。ある日藤巻家の夕食会に招かれた僕は、和也の勉強を見た後和也と和室に向かうが、縁側に座り一心に空を見上げる先生は、和也の呼びかけに応えない。先生は食事中も時折外へ目をやるなどして、あまり熱心には会話に加わろうとしなかった。

「ねえ、お父さんたちは天気の研究をしてるんでしょ。」

和也が箸をおき、父親と僕を見比べた。

「被害が出ないように防げないわけ？」

「それは難しい。」

藤巻先生は即座に答えた。

「気象は人間の力ではコントロールできない。雨や風を弱めることはできないし、雷も竜巻もとめられない。」

「じゃあ、なんのために研究してるの？」

和也がいぶかしげに眉根を寄せた。

「知りたいからだよ。気象のしくみを。」

「知っても、どうにもできないの？」

「どうにもできなくても、知りたい。」

「もちろん、まったく役に立たないわけじゃないですしね。」

僕は見かねて口を挟んだ。

「天気を正確に予測できれば、前もって手を打てるから。家の窓や屋根を補強するように呼びかけたり、住民を避難させたり。」

「だけど、家は流されちゃうんだよね？」

「まあでも、命が助かるのが一番じゃないの。」

奥さんもとりなしてくれたが、和也はまだ釈然としない様子で首をすくめている。

「やっぱり、おれにはよくわかんないや。」

「わからないことだらけだよ、この世界は。」

先生がひとりごとのように言った。

「だからこそ、おもしろい。」

一時はどうなることかとほらはらしたけれど、それ以降は和也が父親につつかかかるともなく、食事は和やかに進んだ。鰻をたいたらげた後、デザートには西瓜が出た。

話していたのは主に、奥さんと和也だった。僕の学生生活についていくつか質問を受け、和也が幼かった時分の思い出話も聞いた。中でも印象的だったのは、絵の話である。

朝起きたらまず空を観察するというのが、藤巻先生の長年の日課だという。晴れていれば庭に出て、雨の日には窓越しに、とっくりと眺める。そんな父親の姿に、幼い和也はおおいに好奇心をくすぐられたらしい。よちよち歩きで追いかけていって、並んで空を見上げていたそう。熱視線の先に、なにかとてつもなくおもしろいものが浮かんでいるはずだと思っただろう。

「お父さんのまねをして、こう腰に手をあてて、あごをそらしてね。今にも後ろにひっくり返りそうで、見ているわたしはひやひやしちやって。」
奥さんは身ぶりをまじえて説明した。本人は覚えていないようで、首をかしげている。

「それで、後で空の絵を描くんですよ。お父さんに見せるんだ、って言って。親ばかかもしれないですけど、けっこうな力作で……そうだ、先生にも見ていただいたらっ？」

「親ばかだつて。子どもの落書きだもん。」

照れくさげに首を振った和也の横から、藤巻先生も口添えした。

「いや、わたしもひさしぶりに見たいね。あれはなかなかたいたいのだよ。」

「へえ、お父さんがほめてくれるなんて、珍しいこともあるもんだね。」

冗談めかしてまぜ返しつつ、和也はまんざらでもなさそうに立ちあがった。

「あれ、どこにしまったっけ？」

「あなたの部屋じゃない？ (注) 納戸か、書斎の押し入れかもね。」

奥さんも後ろからついていき、僕は先生とふたりで和室に残された。

「先週貸していただいた本、もうじき読み終わりそうです。週明けにでもお返しします。」

なにげなく切り出したところ、先生は目を輝かせた。

「あの超音波風速温度計は、実に画期的な発明だね。」

超音波風速温度計のもたらした貢献について、活用事例について、今後検討すべき改良点について、堰を切ったように語り出す。

お絵描き帳が見あたらなかったのか、和也たちはなかなか帰ってこなかった。その間に、先生の話は加速度をつけて盛りあがった。ようやく戻ってきたふたりが和室の入口で顔を見あわせているのを、僕は視界の端にとらえた。自分から水を向けた手前、話の腰を折るのもためらわれ、どうしたものかと弱っていると、スケッチブックを小脇に抱えた和也がこちらへずんずん近づいてきた。

「お父さん。」

うん、と先生はおざなりな生返事をしたきり、見向きもしない。

「例の、南西諸島の海上観測でも役に立ったらいい。船体の揺れによる影響をどこまで補正できるかが課題だな。」

「ねえ、あなた。」

奥さんも困惑顔で呼びかけた。

「と、先生がはつとしたように口をつぐんだ。僕は胸をなでおろした。たぶん奥さんも、それに和也も。」

「ああ、スミ。悪いが、紙と鉛筆を持ってきてくれるかい。」

先生は言った。和也が踵を返し、無言で部屋を出ていった。

おろおろしている奥さんにかわって、自室にひっこんでしまった和也を呼びにいく役目を僕が引き受けたのは、少なからず責任を感じたからだ。

父親に絵をほめられたときに和也が浮かべた表情を、僕は見逃していなかった。雲間から一条の光が差すような、笑顔だった。いつだって陽気で快活で、いつそ軽薄な感じさえする子だけれど、あんな笑みははじめて見た。

「花火をしよう。」

ドアを開けた和也に、僕は言った。

「おれはいい。先生がつきあつてあげれば？ そのほうが親父も喜ぶんじゃない？」

和也はけだるげに首を振った。険しい目つきも、ふてくされたような皮肉っぽい口ぶりも、ふだんの和也らしくない。僕は部屋に入り、後ろ手にドアを閉めた。

「まあ、そうかつかするなよ。」

藤巻先生に悪気はない。話に夢中になって、他のことをつかのま忘れてしまつていただけで、息子を傷つけるつもりはさらさらなかったに違いない。

「様子を見えます。」と僕が席を立ったときも、なにが起きたのか腑に落ちない様子できょとんとしていた。

「別にしない。」

和也はなげやりに言い捨てる。

「昔から知ってるもの。あのひとは、おれのことなんか興味がない。」

腕組みして壁にもたれ、暗い目つきで僕を見据えた。

「でも、おれも先生みたいに頭がよかったら、違ったのかな。」

「え？」

「親父があんなに楽しそうにしているの、はじめて見たよ。いつも家ではたいくつなんだろうね。おれたちじゃ話し相手になれないもんね。」

うつむいた和也を、僕はまじまじと見た。³⁾妙に落ち着かない気分になっていた。胸の内側をひつかかれたような。むずがゆいような、ちりちりと痛むような。

唐突に、思い出す。

状況はまったく違うが、僕もかつて打ちのめされたのだった。自分の親が、これまで見せたこともない顔をしているのを目のあたりにして。母に恋人を紹介されたとき、僕は和也と同じ十五歳だった。こんなに幸せそうな母をはじめて見た、と思った。

「どうせ、おれはばかだから。親父にはついていけないよ。さっきの話じゃないけど、なにを考えてるんだか、おれにはちっともわかんない。」

僕は小さく息を吸って、口を開いた。

「僕にもわからないよ。きみのお父さんが、なにを考えているのか。」

和也が探るように目をすがめた。僕は机に放り出されたスケッチブックを手にとった。

「僕が家庭教師を頼まれたとき、なんて言われたと思う？」

和也は答えない。身じろぎもしない。

「学校の成績をそう気にすることもないんじゃないか、ってお父さんはおっしゃった。得意なことを好きにやらせるほうが、本人のためになるだろうってね。」

色あせた表紙をめくってみる。ページ全体が青いクレヨンで丹念に塗りつぶされている。白いさざ波のような模様は、⁴⁾巻積雲^{（巻積雲）}だろう。

「よく覚えてるよ。意外だったから。」

次のページも、そのまた次も、空の絵だった。一枚ごとに、空の色も雲のかたちも違う。確かに力作ぞろいだ。

「藤巻先生はとても熱心な研究者だ。もしも僕だったら、息子も自分と同じように、学問の道に進ませようとするだろうね。本人が望もうが、望むまいが。」

僕は手をとめた。開いたページには、今の季節におなじみのもくもくと不穏にふくらんだ積雲^{（積雲）}が、繊細な陰翳^{（陰翳）}までつけて描かれている。

⁴⁾「わからないひとだよ、きみのお父さんは。」

わからないことだらけだよ、この世界は——まさに先ほど先生自身が口にした言葉を、僕は思い返していた。

だからこそ、おもしろい。

僕と和也が和室に戻ると、先生は庭に下りていた。どこからかホースをひっぱってきて、足もとのバケツに水をためている。

奥さんが玄関から靴を持ってきてくれて、僕たち三人も庭に出た。

縁側に、手持ち花火が数十本も、ずらりと横一列に並べてある。長いものから短いものへときれいに背の順になっていて、誰がやったか一目瞭然だ。色とりどりの花火に、目移りしてしまう。

どれにしようか迷っていたら、先生が横からすいと腕を伸ばした。向かって左端の、最も長い四本をすばやくつかみ、皆に一本ずつ手渡す。

「花火奉行なんだ。」

和也が僕に耳打ちした。

花火を配り終えた先生はいそいそと庭の真ん中まで歩いて行って、手もとに残った一本に火をつけた。先端から、青い炎が勢いよく噴き出す。和也も父親を追って隣に並んだ。ぱちぱちと燃えさかる花火の先に、慎重な手つきで自分の花火を近づける。火が移り、光と音が倍になる。

僕と奥さんも火をもらった。四本の花火で、真っ暗だった庭がほのかに明るんでいる。昼間はあんなに暑かったのに、夜風はめっきり涼しい。虫がさかんに鳴いている。

ゆるやかな放物線を描いて、火花が地面に降り注ぐ。軽やかにはじける光を神妙に見つめる父と息子の横顔は、よく似ている。

(瀧羽麻子『博士の長靴』(ポプラ社)による)

(注1) 納戸⇨普段使わない家具や食器などをしまっておく物置用の部屋。 (注2) スミ⇨藤巻先生の奥さんの名前。

(注3) 巻積雲⇨うろこ状、またはさざ波のように広がる雲。いわし雲。 (注4) 積雲⇨晴れた日によく見られる、白いわたのような雲。綿雲。

問1 本文中の、話の腰を折る、腑に落ちないの意味として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つずつ選べ。

- (a) ア 話の途中でその場から離れる イ 話の途中を省略して結論を急ぐ
ウ 話の途中で急に口を閉ざす エ 話の途中で言葉を挟んで妨げる
- (b) ア 想像できない イ 納得いかない ウ 信じられない エ 気に留めない

問2 本文中に、「先生は目を輝かせた。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 貸していた本を返してもらえるのがうれしかったから。

イ 今関心を寄せている学問の話ができると期待したから。

ウ ふたりになったところで急に話しかけられ驚いたから。

エ 退屈だったのが自分だけでないとわかり安心したから。

問3 本文中の破線部の場面について話し合っている次の会話文の [I] に当てはまるものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

生徒1 「先生はおざなりな返事をしたきり、見向きもしない。」とあるけれど、どうしてだろう。先生は和也の絵をひさしぶりに見たい、と言っていたのに。

生徒2 僕と本の話をしているうちに、和也の絵の話は忘れてしまったんじゃないかな。超音波風速温度計の話が続けようとしているもの。

生徒3 こんなふうに関心の世界に入り込んでしまうと周りについていけないよね「奥さんも困惑顔で呼びかけた。」とあるよ。

生徒1 でも、「先生がはつとしたように口をつぐんだ。」とあるから、さすがの先生もすぐに事態に気づいたようだね。

生徒2 そうだね。周りもはつとしただろうね。「僕は胸をなでおろした。たぶん奥さんも、それに和也も。」とも書かれているよ。

生徒3 ちよつと待って。先生は「ああ、スミ。悪いが、紙と鉛筆を持ってきてくれるかい。」って言っているんだから、先生がはつとしたように口をつぐんだのは、 [I]

生徒1 そうか。それで和也は「踵を返し、無言で部屋を出ていった。」わけか。この親子の関係は、あまりうまくいっていないみたいだね。

ア 僕のために雲の絵を解説してあげたいという気持ちがあつて、それには紙と鉛筆が必要だと思つたからじゃないかな。

イ 奥さんの声を聞いて、今自分がいるのは大学の研究室じゃなくて自宅の和室だつてことに気づいたからじゃないかな。

ウ 学問についてふと頭に思い浮かんだことがあつて、忘れないうちにそれをメモしておこうと思つたからじゃないかな。

エ 和也の絵に雲の名前を書いていないところがあつて、書き足そうと思つていたのを急に思い出したからじゃないかな。

問4 本文中に、「腕組みして壁にもたれ、暗い目つきで僕を見据えた。」とあるが、このときの和也の気持ちの説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 父親の求めで絵を探しに行ったのに結局は無視されて、いつも周囲を振り回す父親の身勝手さを改めて思い知らされ、嫌気がさしている。

イ せっかく父親が自分の絵に関心を向けてくれたのにわざと学問の話を始め、父親の関心を奪っていった僕に対し、強い反感を抱いている。

ウ 息子の絵のことなど忘れ、僕を相手に夢中で学問の話をする父親の姿に、やはり父親は自分に関心を向けてくれないと感じ落胆している。

エ 家庭教師の僕がもう少し熱心に教えてくれれば成績が上がリ、父親の関心が自分に向くようになるはずなのと思ひ、僕を非難している。

問5 本文中に、妙に落ち着かない気分になっていた。とあるが、なぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 父親との親子関係をなかなかうまく築けない不満と焦りでいらだつ和也を見て、その原因の一端が自分の存在にあるのではないかと疑い始めているから。

イ 今まで見たこともないほど楽しそうにしている父親の姿に傷つく和也を見て、自分がかつて親に対して抱いた思いが呼び覚まされそうになっているから。

ウ 学校の成績に劣等感を抱いて落ち込む和也を見て、家庭教師の自分が勉強を十分に見てはこなかった結果だと思って打ちのめされそうになっているから。

エ 楽しそうな父親の姿に驚いている和也を見て、学問の話題が二人を隔てていることに気づき、先生と和也の仲を取り持たなくてはと思い始めているから。

問6 本文中の、「わからないひとだよ、きみのお父さんは。」という僕の発言の意図として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 先生は不器用ながらも先生なりに息子のことを考えていると、和也にそれとなく気づかせようとすると同時に、物事も人もわからないからこそおもしろく、向き合う価値もあるのだと伝えようとしている。

イ わからないからこそ世界はおもしろいのだと考え、役に立ちそうもない気象の研究に一心に打ち込む父親を見習って、役には立たないかもしれないが和也には絵の道に進んでほしいと伝えようとしている。

ウ 熱心な研究者であるなら息子にも学問をさせたいと考えるのが普通なはずなのに、息子には得意なことを好きにやらせたいと考える先生が僕にもわからず、自分も和也と同感であると伝えようとしている。

エ 僕自身も先生がどういう人なのか今でもよくわからないが、それでも学問の師として尊敬しており、たとえ父親のことがわからなくても息子として和也も父親を敬うべきではないかと伝えようとしている。

問7 本文中に、軽やかにはじける光を神妙に見つめる父と息子の横顔は、よく似ている。とあるが、この一文の表現効果の説明として、最も適当なもの、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 共通の趣味である花火を、父と協力して楽しむ和也の横顔が父親と似ていると言及することで、今の先生と和也は似た者同士であるからこそ仲が悪いが、近いうちに何らかのきっかけで仲直りするだろうということを暗示する効果。

イ 隣に並んで花火をしてはいるが、場を取り仕切る父親に嫌悪感を抱く和也の横顔が父親と似ていると言及することで、先生と似ているからこそ和也の反発は根深く、簡単に打ち解けることなどできないということを暗示する効果。

ウ 父親と一緒に花火に夢中になって、日頃の対立を解消した和也の横顔が父親と似ていると言及することで、和也は父親に反抗するあまり勉強から逃げていたが、将来父親と同じく学問に夢中になるはずだということを暗示する効果。

エ 父に火をもらい、一緒に花火をしている和也の横顔が父親と似ていると言及することで、先生と和也の親子関係が現状では必ずしもうまくいってはいないとしても、親子としてのきずなで結ばれているということを暗示する効果。